編集後記

『明海日本語』は，明海大学日本語学科の機関誌として発行され，10年以上の歴史を持つ。スタッフの研究の公表の機会を作り，新設の大学の活動状況を外部に知らせる機能があった。これまでも優秀な論文が本誌で発表されてきた。

『明海日本語』は，ささやかな前進として，研究を活発化するため，大学院生の論文の掲載に門戸を開いた。提出された論文は，日本語学科専任教員が審査し，場合によっては書き直しを命じる。あるいは掲載を認めないこともある。教員の論文であっても，相互に審査し，採否については院生と同様の措置をとる。つまり本誌掲載の論文は，レフリー付きの，学術雑誌並みの価値を持つ。

13号での論考の配列は，論文テーマ相互の関連によった。研究ノートを設け，発表の機会をさらに広げることにした。ところが今回は日本語学科スタッフへの周知が遅れたために，投稿がなかった。編集担当の井上が急きょ短文をまとめて，末尾に入れた。

また，学生の卒業論文・卒業研究の題名と要旨を掲載する。これは学生の自主的な研究活動の発表である。明海大学日本語学会の主な構成員である学部学生の記念，思い出になることを期待したい。

2006年3月に第10・11合併号を刊行したので，本号は第13号になる。これで刊行以来の年数と号数がきちんと揃う。

来年度以降も年1回刊行のペースを厳守し，卒業生には卒業式に，在校生には新年度のオリエンテーションの際，配布できるようにしたい。

本号の編集には，大学院博士後期課程の木下謙朗・堀内貴子が活躍した。また，本学卒業生の三橋麻子が卒業論文要旨の整理にあたった。

2008年1月

井上史雄